聖学院大学ボランティア活動支援センターのボランティアコーディネーター。写真左から原一織（いおり）さんと数井美由紀さん。
ボランティアの“ボラ”に掛けて魚のボラの被り物を作成し、オンライン活動の雰囲気づくりに役立てています。

ボランティア活動を通じた学生の成長を応援

聖学院大学ボランティア活動支援センター（上尾市）

聖学院大学では、東日本大震災の復興支援をはじめ、子育て支援、障害者支援など幅広いボランティア活動に取り組んでいますが、その学生たちを支えているのがボランティア活動支援センターです。ボランティアコーディネーターが、学生一人一人に寄り添いながら、活動を通じての成長を応援しています。

キリスト教の精神に基づく教育を実践している聖学院大学は、もともとボランティア活動が盛んな風土があり、大学側も活動をサポートしてきました。東日本大震災の直後、多くの学生から「被災地まで復興支援に行きたい」という声が上がったことがきっかけとなり、ボランティア支援をさらに強化するために「聖学院大学ボランティア活動支援センター（以下、センター）」を翌年4月に設立。現在、3人のボランティアコーディネーター（以下、コーディネーター）が配置されています。

センターの主な役割はボランティアを募集している諸団体と学生のマッチングです。地域の市民活動団体や福祉施設、行政などのボランティア募集の情報を学生に発信して、双方をつなぎます。なかなか一歩を踏み出せない学生の背中を押すのもコーディネーターの役割です。

また、学生から「ボランティア団体をつくりたい」という相談を受けた際は、立ち上げと運営の支援を行っています。

さらに「学生サポートメンバー（通称サポメン！）養成講座」を年1回開催するなど人材育成も担っています。コーディネーターの数井美由紀さんは「当センターの特徴は学生が主体的に関わって運営していること」だと話します。「サポメン！は、学生目線を活かしてボランティア活動へのきっかけをつくったり、活動の活性化のための企画・運営を行ったりしています」。

地域課題に気付く貴重な機会

センターは活動資金の支援も担っています。毎年、大学の同窓会から支援を受けて「ボランティア・まちづくり活動助成事業」を実施していますが、公開審査会には上尾市社会福祉協議会など、地域の方々も審査員として参加しています。「助成金申請を通して、学生と地域とのつながりを持つことができたり、プレゼン力を磨くことができたりしました」（コーディネーターの原一織さん）。

センターでは主な事業として東日本大震災復興支援活動を継続的に展開してきましたが、コロナ禍以降は主にオンラインを活用して被災地との交流事業を開催しています。

センターがスタートして10年が過ぎました。数井さんは学生にとってのボランティア活動が「地域課題に気付き、その解決を考える貴重な機会になっている」と考えています。例えば子どもと楽しく遊ぶことに主眼を置いて子育て支援活動に取り組んでいた学生たちが、背景にある母親の孤立に気付き、地域の課題として捉えたケースがありました。ボランティア活動には学校の授業では得られない学びがあり、センターでは一人一人の学生がボランティア活動を通して大きく成長できるように常に寄り添い、活動のフォローアップを行っています。

プレイパークのお祭りにブース出展し、地域の子どもたちと交流する学生。ボランティア活動に取り組むことで自分が役に立っていることを実感し、自信をつけて、大きく成長していきます。